

目 次

	頁
1. [巻頭言] 追想——一昔、二昔—— 川口 容子	2
2. ミニミニミュージカルをつくってみよう 藤田 光子	3
3. Bach音律解説史とLehman律（その1） 野村 満男	4
4. 会員名簿の訂正	6
5. 新入会員紹介	6
6. [他学会の催し] 東洋音楽学会公開シンポジウム	7
7. 会員によるコンサート案内	8
8. 新刊紹介	9
9. 第5回日本音楽表現学会熊本大会予告とお誘い	9
10. 学会からのお知らせ	10
11. 学会からのおねがい	11
12. 「コンサート等後援願」書式	12
13. 「入会申込書」書式	12
14. 役員名簿・編集後記	12

日本音楽表現学会事務局

〒700-8530 岡山市津島中3-1-1 岡山大学教育学部 奥研究室気付

Tel. & Fax. 086-251-7647 E-mail: s-oku@cc.okayama-u.ac.jp

<http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~eeakita/kitayama/OHG-index.htm>

郵便振込口座：01370-6-78225 音楽表現学会

銀行口座：三井住友銀行(0009)岡山支店(651)日本音楽表現学会(普)6639449

日本音楽表現学会理事 川口 容子（ピアノ）

十年一昔と申しますが、この10年～20年の間に、国と国とを境する敷居が低くなり、旅費が安くなり、海外に出かけることが容易になりました。海外で演奏することも、また、逆に海外から演奏家を招いて国内で共演することも難しいことではなくなりました。私が、初めて海外で演奏をしたのは1972年のニューヨーク州バッファロ市での演奏でしたが、1994年からは1年に数回、本年の5月にバーゼルで開催した娘（クラリネット奏者）とのデュオコンサートまで、31回の海外演奏をこなしました。一方、外国の方との国内での共演も2004年のローデンホイザー氏（元ベルリンフィル首席クラリネット奏者、ミュンヘン国立音大教授）で35回を数えました。自分の演奏旅行だけでなく、客員研究員として海外に滞在していた息子を迷惑訪問したり、夫の学会にお邪魔虫として同行したりして、本年だけでも、7ヵ国、16都市を訪ねました。50年前に吾妻徳穂さんが、世界に日本舞踊を見せて歩きたいとの強い思いから、アズマカブキとして海外公演を行った時には、持家も茶道具も、それこそ持ち物という持ち物を全部売って借金を返済したという話を聞くと、隔世の感があります。ここでは、一昔か二昔かの間の自分の演奏と旅にまつわる記憶の断片を綴って埋め草とさせて頂こうと思います。

共同研究者であった季華錚先生のお世話で中国を訪問した時、揚州、無錫、南京師範大学の音楽系の先生方を含む多くの熱烈な聴衆にソロ演奏を聴いて頂き、その後の公開レッスンも熱の入ったものになったことを思い出します。1994年のことでした。上海にはその後、1999年、2004年に京都教育大学の交流協定締結校である上海師範大学での演奏で、本年に第25次教育文化界友好訪中団の一員として、都合4回訪れました。行くたびに、街の様子が大きく変貌していることに驚かされます。京都は50年経っても大して変わりませんが、上海では10年経てば浦島太郎です。

本年に訪れた河南博物館では、「七孔骨笛」や「王孫誥甬鐘」という古代楽器を見ました。七孔骨笛は今から8000年から9000年前に作られた鳥の骨製のフルートであり、今でも吹けば葦笛のような音が出るといわれています。王孫誥甬鐘は今から2400年も前に作られたカリヨンで、音域は5オクターブにも達し、鐘の正面と側面では高低の違った音が出せ、西洋音楽の12平均律に匹敵する独自の12律が存在し、転調も行われたと云います。古代楽器のレブリカによる演奏を聴いていると、過ぎ去った数千年という時間も一炊の夢という気がしてきます。

チェコのヤヒモフはヨーロッパの保養地で自然が人を包み込むような町です。そのホールの舞台上には、私の大好きな作曲家スメタナの胸像がおかれています。私は、そこで1999、2001、2002、2004、2005年と5度の演奏を行いました。いつも彼に聴かれているような感激と緊張を覚えます。その他、ドイツのフライブルクやベルリン、スイスのバーゼル、チューリッヒ、レンツァーハイデ、フィッシングゲン等々、ヨーロッパでの演奏は会場と聴衆と音楽が一つに融合するような感覚、日本やアメリカでは不可能な演奏ができることを知りました。それは背景にある、ゆったりとした時間の流れ、徹底した個人主義、キリスト教に基づく博愛精神、聴衆の音楽の理解の高さと結びついたものかも知れません。

演奏することは、楽譜に書かれている音楽を読み取り、私という人間を通して人に伝えることです。それは、人間性をさらけ出すことであり、自分の哲学を語ることでありとも思います。楽譜を読むことは奥の深いもので、それまで読めていなかったものが研鑽を積むことによって読めてくることがあります。このことは、自分の授業内容にも反映しますので、授業を改善・充実させていくためにも大切な事だと思っています。よりよい演奏をしたいと心がけている所以です。

ミニミニミュージカルをつくってみよう

別府大学短期大学部 藤田光子（声楽・音楽教育）

ミュージカルといえば「サウンドオブミュージック」「キャッツ」など素晴らしい舞台芸術を連想しますが、昨今では「マッスルミュージカル」などさまざまなジャンルとの融合、迫力ある見せる舞台というものも目を惹いていて、メディアなどでもよく取り上げられています。

また今年のグリーンアベニュー大会では、22年間に渡るミュージカルの素晴らしい活動が紹介されていました。学生達が成長していく姿、協力して目標にすすんでいく姿はとても美しく、ミュージカル活動の前と後の学生の変化、このような取り組みを行う先生方の指導のすばらしさであろうと感動致しました。

私の所属する短大では、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生たちが子どもたちの前で表現するさまざまな表現活動が行われています。どの学生もパネルシアター、エプロンシアター、絵本の読み聞かせ、指遊び手遊びまたオペレッタなども授業や研究会活動などを通して盛んに行われて、さまざまな場所での公演を行うなど子どもたちの前で演じることの大好きな学生ばかりです。その中で小学校教諭を目指している学生には「どんな創作活動を小学校で扱うことができそうか」「自身が指導することを考えて」という視点で、自分達で何ができるかどのようなものなら可能かなどを指導法の演習内で扱っています。例年指導法では、年間の最後に創作を含めた、リコーダーアンサンブル、合奏、音楽劇などによって仕上げを行っています。まとめ段階の短い時間で創作という点で何ができるかを学生たちに投げかけ、ともに考えながらすすめています。

そこで本年学生から出てきたのは「ミニミニミュージカル」というものでした。必要なものは「物語・音楽・ダンス・舞台・衣装…」大きな舞台や、大きな装置、立派な衣装や照明などがなくて

も、子どもたちを楽しませることはできないだろうか。子どもたちを楽しませるだけではなく、子どもたちの手でつくることのできるものはないだろうか。はじめ学生たちは自分たちが演じることだけを考えていました。小学校などクラス単位や少人数の前でもパネルシアターのようにできる、絵本を読み聞かせるようにできるミュージカルを作ってみたい。さらに学生からは「自分が指導し子どもたちが演じるミニミニミュージカルを自身も体験し、指導の仕方も考えてみたい」という意見がはじめました。構想は少しずつ広がりを見せ、楽器は講義内で扱っているソプラノリコーダーを中心に使おう、楽曲は教科書の中から、学年は高学年がいいのか。歌と物語をどのように創作し、音楽をどのように取り入れようか。そこで小学校5年生の教材を用いて、その楽曲から連想する物語を作成することに決めました。リコーダーの合奏や音を使用し、せりふ、歌、動きなども組み合わせて作成する小さな小さなミュージカルとなりそうです。

これらがどのように進んでいくのか今見守っているとところです。素晴らしい教材が手軽にたくさんありますが、学生たちには自分で考え、悩み、創り出す事も学んでほしいと考えています。学生の構想は広がるばかり。大小に関わらず学生は自身が演じる経験は持っています。しかし指導して子どもたちが演じるという部分は未知の世界。短大2年の後期を迎え自分が指導する立場にまもなくする事を察しながら、いろいろなことに必死で取り組んでいます。

この活動がどのような結果になるのか、また学生の成長も楽しみにしているところです。「クラスの子どもたち全員が参加できるものにしたい」と。教育実習を終えたばかりの学生が実際の子どもたちの顔を思い浮かべながら語ってくれることがとてもうれしくほほえましいのです。

その1. Bach音律解説史

野村 満男 (古楽研究)

鍵盤楽器は演奏に先立ち「調律」の問題に直面し、調律技法はピッチにも関係がある。1970年代からいわゆる「古典調律」が一般化しながらBachの《平均律クラヴィーア曲集（以下WTC）》のための音律は永らく謎で、大きい関心事であり続けていた。現代の研究者H.KelletatやH.A.Kellner、J.Barnes（《WTC》プレリウドの中の和音の用法に注目）、M.Lindley（オルガン曲中の使用音程の微妙な響きの変化に注目）等によるBach音律解釈は、確証のないところに根拠を求めようとした工夫の産物でありそれぞれに欠点があった。例えば1960年頃の第三者が追認しにくい時代のKelletatの律（邦訳『音律について上・下巻』シンフォニア刊）は、当時の

表1 標準偏差値（値が小さいほど多くの調に調和することを示す）

2.76	: Neidhardt第三
5.87	: j. Barnes
6.48	: Werckmeister第三
6.68	: Vallotti
6.76	: H. A. Kellner
7.48	: Kirnberger第三
8.61	: H. Kelletat
9.49	: Kirnberger第二
9.64	: Silbermann (1/6 SC)
11.57	: Silbermann (1/6 PC)
20.24	: Aron

一見抽象的に見える紋章・図形と、音律を結び付ける試みは1970年代からあり、有名な王冠紋章シール（1722年）に着目、「1/5コンマのバッハ調律」でドイツ特許を取得したのが故H.A.Kellner（邦訳『チェンバロの調律』東京音楽社）。世界中の約300台のパイプ・オルガンに採用された。その調律法も根拠ある「バッハ音律」ではなく「ケルナー創案の音律」といったほうが正しい。Kellnerは紋章シールの王冠の矩形部分の数から1/5コンマ五度を発案したが、Andreas Sparshuh（獨・数学者）はそれを純正五度と解釈、バッハ音律を表2のようにHz数で示した。シールの意匠の見事さもさることながら、丸と矩形の

普及版簡便法「キルンベルガー調律」を推すあまり《WTC》全曲には難のある音律解釈をしている（表1）。もちろん、師Bachの指導に従わなかった高弟Kimbergerの調律法は《WTC》向きではない。2005年のBradley Lehman(米)によるBach音律では、権威ある『新バッハ全集』も装飾紋として見過ごしてきた《WTC第一巻》の表紙にある自筆の螺旋状ループ模様（図1）がロゼッタ・ストーン（J-F.Champollionによる象形文字解読の基になった）Napoleonの戦利品）であったとして、Bachの楽曲同様美しくエレガントに書かれた「コンマ率分配表記図」と力説、話題をさらった。

図1 《WTC第一巻》の表紙にあるBach自筆の螺旋状ループ模様
注目：二回転ループと三回転ループは渦線の入り方と抜け方が逆

合計が12……偶然ではあるまい。《WTC第一巻》の渦巻き模様も、単に装飾として描かれた確率はごく低いという。

羽根ペンの特性を活かしたループ模様のカリグラフィーはBach時代、著作物のタイトル・ページほかによく用いられている。

ループ模様に意味のある例として1722年、

図2 『音楽計算』の表紙

ドレスデン近郊のオルガニストFriedrich Suppigが作曲した‘音楽迷路 Labirynthus Musicus (24すべての調で書かれたファンタジア集)’と、対で出された‘音楽計算 Culculus Musicus (24すべての調を演奏可能とする31等分律の解説書)’の表紙(図2)が指摘されている。それがライブツィヒに出る頃のBachの眼に触れたらしい。(J.C.Francisによる)。

《WTC第一巻》は、すでにケーテン時代、長男《Friedeman Bachのためのクラヴィーア小曲集》にプロトタイプが書かれている(有名なハ長調プレリュードは後半が全く異なる)。その調性選択の構想は、Johann Kaspar Ferdinand Fischerの《アリアドーネ・ムジカ》から靈感を受けたとしても、《第一巻》表紙の自筆ループ模様はこのSuppig作品タイトルからの影響といえるだろう。紋章シールとバッハ音律との関連が注目されたあと、《第一巻》表紙のループ模様に着目したのはLehmanが初めてではない。上記A.Aparschuhは1998年、ループ模様

を数学的考察によって $a^1=420\text{Hz}$ (のちに撤回、2006年 $a^1=410\text{Hz}$ に修正)から始まる調律法の「ビート/秒」数を示唆しているとした(図4)。Michael Zaph(獨・数学者 2001年)はループがCから始まる五度間の「秒/ビート」数を示すとする解釈をしている。「王冠解釈その一」(図3)を提案したスイスのJohan Charles Francisは、2005年のLehman律発表直前の自著 "The Esoteric Keyboard Temperaments of J.S. Bach"で、やはり数学的分析からループ模様がビート数を示しているとした。Keith Briggs(英・数学者 2003年)は、ループ模様から判断して使用ピッチは当時の標準的カマートンの $a^1=425\text{Hz}$ あたりであったとみている。調律時のビート数はピッチによってまた適用音域によって変わるため、ビート数説は使用ピッチを最初から確定しなければならないが、従来ループ模様を「ビート数分配図」とみる研究者が多かった。いずれにしろ《WTC第一巻》は「全調可能な調律の実習テキスト」でもあったらしい。


図3 王冠解釈その一(Francis)

調律手順と各音セント値 ($a^1=415\text{Hz}$)	
① F-B \flat -E \flat -A \flat -C \sharp -F \sharp	ゼロビート
② F-C	1/2ビート
③ F \sharp -B	1/2ビート
④ C-G-D	1/1ビート
⑤ B-E-A	1/1ビート
⑥ D-A	3/2ビートをチェック
B	1089.29(c)
B \flat	997.83
A	891.87
A \flat	793.92
G	697.30
F \sharp	590.01
F	499.79
E	391.05
E \flat	295.88
D	196.15
C \sharp	91.97
C	0.00
標準偏差 6.86	


図4 王冠解釈その二
(Sparschuh)

各音Hz ($a^1=455.5\text{Hz}$)	
B	512.5
B \flat	486.0
A	455.5
A \flat	432.0
G	410.0
F \sharp	384.0
F	364.4
E	341.6
E \flat	324.0
D	306.0
C \sharp	288.0
C	273.3

(この稿続く)



会員によるコンサート案内



中国音楽コンサート

日時：2006年11月26日（日）14:00～
会場：天竜壬生ホール（浜松市）
主催：天竜日中友好協会
特別出演：王明君（笛子・洞簫、員・二胡）
天竜日中友好協会会員有志




ハープとピアノの夕べ

日時：2006年12月15日（金）19:00開演
会場：大阪 ザ・フェニックスホール
日時：2007年1月13日（土）18:30開演
会場：東京 銀座 王子ホール
出演：岡崎 章 (Pf) & 松川恭子 (Harp)
プログラム：シマノフスキ：マスク Op.34 より「第1曲 シエラザード」
ショパン：2つのノクターン Op.55-1,2、ポロネーズ第5番
fis-moll Op.44



札幌コダライ合唱団創立30周年記念 ヘンデル「メサイア」演奏会

日時：2006年12月22日（金）18:30開演，23日（土）14:00開演
会場：ちえりあホール（札幌，22日），マリンホール（小樽，23日）
指揮：中村隆夫
ソリスト：一鐵久美子(S)，齊藤みゆき(A)，三山博司(T)，中原聡章(B)
演奏：札幌コダライ合唱団・合奏団，メサイアコール，小樽潮陵高校音楽部



作曲家の会「環」第30回特別定期演奏会—石柝眞禮生没後10年—

日時：12月27日（水）17時30分開演
会場：東京文化会館（小ホール）
曲目：後藤 丹作曲 連作歌曲《この世界のぜんぶ》（詩：池澤夏樹）
石柝眞禮生作曲 低声と室内楽のための《月に吠える》（詩：萩原朔太郎），他



モーツァルト In 聖徳 2006

W.A.モーツァルト（1756-1791）生誕250年の2006年、聖徳大学音楽文化学科ではモーツァルトに関する様々な催しが展開されています。詳しくは以下をご覧ください。
<http://www.seitoku.ac.jp/daigaku/music/mozart06/events/indexsoa.html>



新刊紹介

野村満男編著：古楽器研究4 チェンバロ クラヴィコード オリジナル楽器便覧—下巻—

ドイツ・日本・ノルウェー・ハンガリー・フランス・

ベルギー・ポルトガル・ルーマニア・個人蔵篇

付・市販設計図案内、フォルテ・ピアノ情報、基礎知識《メモ》・関連資料

東京コレギウム 3000円



寺内大輔作曲：流れ～ヴァイオリンとピアノのために～

2001年 上土居弘予氏と三崎富弥香氏によって初演

2005年 ジョグジャカルタ現代音楽祭入選・再演

マザーアース社 1575円



安藤政輝：CD「安藤政輝 箏の世界」

《五段砧》《松竹梅》《八重衣》

ビクターエンターテイメント 3150円

設立5周年

日本音楽表現学会第5回大会（熊本大会）

これまでに蓄積した研究、日頃の実践、音楽を持ちよりましょう。

航空券の早割など、お手配はお早目に。

期 日：2007年6月16日（土）～17日（日）

会 場：熊本大学

基調講演とシンポジウム：「日本の合唱」（仮）

基調講演 講師：松原 千振 氏 東京混声合唱団常任指揮者

シンポジウム司会：中村 隆夫 氏 北海道教育大学教授、札幌コダライ合唱団・合奏団指揮者

パネリスト：松原 千振 氏 東京混声合唱団常任指揮者

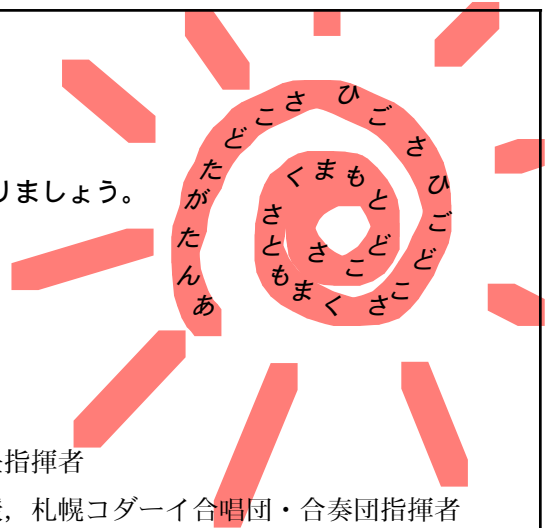
古橋富士雄 氏 NHK東京児童合唱団名誉指揮者、日本合唱指揮者協会理事長

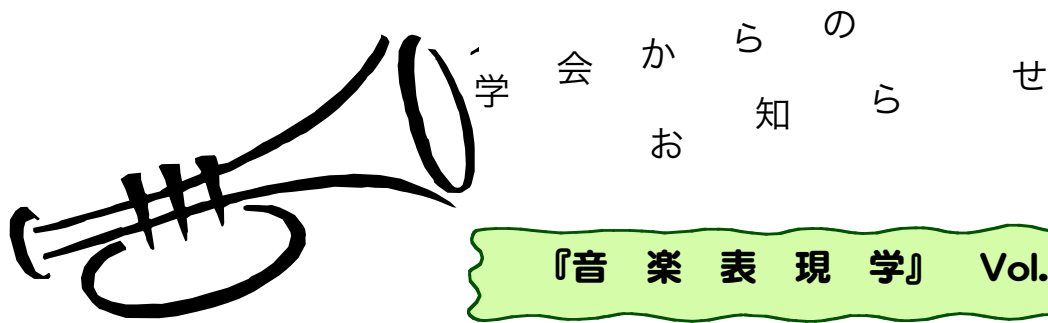
齊藤 祐 氏 鹿児島大学教授、声楽家

現時点での愛称候補：火の国大会、ひのくに大会、おてもやん大会、その他

ご意見をお寄せください。

実行委員長：吉永誠吾氏（熊本大学教授）





『音楽表現学』Vol.4をお届けします。多数の応募があり、世にありがちな3号の壁を大きくジャンプした感があります。会員のみなさまには、掲載論文について感想やご意見などをお寄せいただけますようお願いいたします。

『音楽表現学』 Vol.5 原稿募集

大会日程との関係で締め切り日を5月31日に変更いたします。

来年度より、編集スケジュールの都合上、投稿の締め切り日を1ヶ月早めて5月31日にすること、投稿時に原稿のコピーを6部提出することの2点について変更します。来年度の投稿を予定されている皆様はお間違えのないようお願いいたします。詳しくは、『音楽表現学』Vol.4巻末の「投稿規定」および学会ホームページ（下記）をご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしています。<http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~eeakita/kitayama/toukoukitei.htm>

2006年度会員名簿の修正について

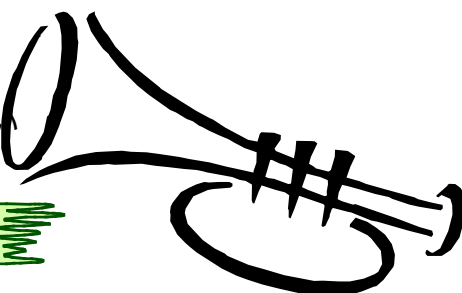
自己紹介形式の名簿、「会員のみなさまの姿が見えて楽しかった」との声を複数いただきました。しかし、作業を丹念に行ったつもりでしたが、誤字・誤植が少なからず見つかりました。このニューズレターには、お知らせいただいたものについて記載しています。その後の訂正がありましたらどうぞ遠慮なくお知らせください。よろしく申し上げます。

ニューズレター2006-No.3号にご投稿ください

これまでの大会では毎年ミュージカル実践の発表がありました。そこで今号では、ミュージカルについて別の角度から実践をされている会員から投稿をいただきました。今号ではまた、古楽における重要な論点、調律について研究の報告をいただきました。この原稿は次回にも続きが掲載される予定です。ニューズレターは会員の交流の場です。どうぞ、音楽表現に関するご意見、掲載記事に関するご意見などをお寄せください。ご投稿をお待ちします。

学 会 か ら の

お ね が い



学会費納入に関する切実なお願い

学会は会員の学会費によって運営されています。発足後間もない本学会では、志ある方々の会費前納が学会運営の潤滑油となっています。一方では過年度会費未納の方の存在が経費の負担を招いていることは否めません。

未納の方の中には「郵便局へ行く時間がない」人もいらっしゃるでしょう。そのような方には、複数年度分を前納されることをお勧めします。いずれにせよ、今年度までの会費の納入を切にお願いいたします。

なお、送金は、ニューズレター最終ページに記載された口座へお願いいたします。銀行からの送金は送金者氏名がカタカナで記されるだけです。会員数が増えてくると同姓同名による混乱が懸念されます。できるだけ郵便局からの送金をお願いいたします。郵便局から送金される場合には、振込用紙をATMに通していただくと手数料が安くなります。

学会は会員の音楽活動・研究活動をサポートします。

★ 研究発表の場の一つが機関誌『音楽表現学』です。

本学会は「日本学術団体」の広報協力団体です。『音楽表現学』に論文が掲載されると、大学などでは「査読付学術論文」としての評価を受けます。年度末などに業績の報告をされる際には、その旨をお記し下さい。

★ 大会の口頭発表は、日本音楽表現学会ならではの表現力を駆使して、文字だけでは伝えられない音声を用い、これまでの研究を発信できる場、それを参加者一同が共有できる場です。

どの大会でも、口頭発表のこのような長所を生かす工夫をしています。例えば他の学会と比べて発表時間を若干長くなっていますが、それは、発表の中で実演などが含まれることを想定しているからです。会員自身の音楽表現の創意や工夫、実践を披露し、その適用性を問うワークショップや研究発表が本学会の伝統になってきました。日本音楽表現学会ならではの生の音楽表現を含めた発表の機会をご利用下さい。

★ ニューズレター「コンサートのご案内」では、会員による各種の演奏、ワークショップ、イベントなどの活動紹介を行います。

これらの活動を学会は「後援」します。みなさまの活動を、ニューズレター最終頁の「後援願」の様式で、どしどしお寄せ下さい。

★ 「新刊案内」では、会員による刊行物の紹介を行います。上梓されたらお知らせください。

★ その他、所属されている他学会の情報などもお寄せ下さい。

(様式)

コンサート等後援願い
日本音楽表現学会の後援をお願いします。

氏 名： _____
所 属： _____
コンサート等の名称： _____
コンサート等の趣旨： _____
主な内容： _____
期 日： _____
会 場： _____
連 絡 先： _____

(様式)

日本音楽表現学会入会申込書
日本音楽表現学会に入会を申し込みます。

氏 名： _____
専門分野： _____
住 所： _____
所 属： _____
連絡先： _____
連絡先電話番号： _____
連絡先Fax.番号： _____
e-mail アドレス： _____
推薦者名 (学会員・1名) _____
音楽表現学会に期待されること。ご意見等： _____

ニューズレターの「新入会員のご紹介」欄のための原稿執筆のお願い

日本音楽表現学会ではニューズレターで新入会員の紹介を自己紹介の形式で行っています。申し込みと同時に原稿を送っていただくと、連絡や編集作業が順調に進むように思われます。ご協力をよろしくお願いいたします。

- 1) 自己紹介の内容：以下の項目の中から適宜選択して、文章にしてください。
なお、「よろしく申し上げます」などのご挨拶用文は省きますので、あしからずご了承下さい。
 - ・所属 ・専門 ・音楽表現について思うこと ・この頃思うこと
 - ・モットー ・夢 ・ホームページアドレス, 等々
- 2) 字数：150字を超えない程度でお願いします。
- 3) 〆切：入会申込書と同時に提出ください。
- 4) 送付方法：メール 本文としてお記し下さい。メールをお使いにならない方は郵送でお願いします。
- 5) 宛先：s-oku@cc.okayama-u.ac.jp

日本音楽表現学会 役員

会 長：中村 隆夫
副 会 長：安藤 政輝, 奥 忍
理 事：川口 容子, 権藤 敦子
 佐々木正利, 森川 京子
会 計 監 事：若井 健司, 加藤 晴子
編 集 委 員 長：北山 敦康
副 委 員 長：杉江 淑子
委 員：加藤富美子, 後藤 丹,
 谷口雄資, 安田 香

編 集 後 記

同封の『音楽表現学』Vol.4の分厚さに驚かれた会員が多いことと思う。投稿された会員、論文の劇的増加に励まされた編集委員会の働きに拍手を送りたい。事務局としては経費を気にしつつ、『音楽表現学』の成長に胸を熱くしつつ、編集したニューズレター2006年No.2号をお届けする。

やがて終わろうとする2006年、メディアでは次々と不祥事が報道され、学校教育でもほころびが目立ち、日本が激しく傾いてきたように感じられる。JASRACの著作権に関する主張は一般社会の支持を得られるのだろうか。様々なことどもが気にかかる年の暮れである。どうぞよいお年を。 (奥忍)